

今でも謎が多いオホーツク人

札幌市医師会
札幌がん検診センター

かわらさき みつる
河原崎 暢

明治二三年（一八九〇）、礼文島や利尻島（宗谷総合振興局）から発見された縄文の無い土器や歯牙製婦人像から、不思議な集団の存在が浮かび上がる。人骨から日本人、縄文人やアイヌ民族とも別種の「流水の民」が、北海道で縄文時代後期から擦文時代、日本で弥生時代後期から鎌倉時代までの約千年間、オホーツク海沿岸を中心にサハリンや南千島列島に住んでいた。『街道をゆく』の著者の司馬遼太郎から「日本のシュリーマン」と言わしめた米村喜男衛によるモヨロ貝塚の発見からミステリアスなオホーツク人の姿が現れてくる。

地方出張の合間を縫い「網走市立郷土博物館文館モヨロ貝塚館」を訪れる機会があった。明治二五年（一八九二）、米村は青森県に生まれ、考古学に興味を抱き、理髪店で住み込みの見習いをしながら独学を続ける。たまたま訪れた網走で露出した貝塚を発見すると、後に「オホーツク式土器」と呼ばれる土器の特殊性を見抜き、移住してまでも発掘に執着した。火山国の日本は酸性土壌で骨が残りにくいだが、この貝塚は貝からのアルカリ性の排泄物で中和傾向となり一〇〇体を超える人骨が残され、一気に研究が進む。米村は副葬品の特徴から大陸文化が北方から伝わったとし、東北アジアで栄えた遼・金時代のものと考えた。大陸の沿海州を流れるアムール川周辺の遺跡との類似性が指摘されると、中流域に住んでいたツングース系民族の靺鞨人が北海道まで侵出したとする渡来人説が有力となる。だが、類似性は交易で深く結びれていたからとし、現在、サハリン北部に住む少数民族のギリヤークがオホーツク人の子孫として有力視されている。

日本で最古の正史となる『日本書紀』で、飛鳥時代の記述に登場する「肅慎」がオホーツク人ではと推測される。中国の史書『新唐書』によると、オホーツク人が沿海州を通じて唐に朝貢し武器となる鉄器の取得が容易となり、渡嶋蝦夷へ圧力をかけてきた。渡嶋は北海道、蝦夷は住んでいた縄文人を指すらしい。唐と戦うため朝鮮半島で行われた「白村江の

戦い」の前に、大和朝廷は日本列島の北方社会を安定させようと阿倍比羅夫に遠征を命じた。『日本書紀』は「二〇〇艘の船に乗り渡嶋の大河の河口に着くと、海岸に千人強の蝦夷が駐屯していた。肅慎の大軍に殺されると助けを求める」「比羅夫は肅慎を呼び寄せるが交渉が決裂し戦闘になると、肅慎は弊賂弁島に退却し妻子を殺し全滅した」と記す。比羅夫側も崇神天皇の子孫にあたる能登臣馬身龍が戦死しており国挙げての戦いだった。続縄文人が版図を広げる律令国家へ庇護を求めることで、オホーツク人は勢力が衰え北方へ逃れたという。当時、交易上の海路の交差点だった奥尻島（松山振興局）の青苗にオホーツク人の住居跡が確認されると弊賂弁島では、さらにまた、住居跡の近くの墓から正倉院御物に匹敵する巨大な翡翠勾玉を身につけた被葬者が見つかり能登臣馬身龍かと推測された。しかし、最近の調査で身につけていた勾玉と年代が合わないことが分かる。昭和四八年（一九七三）、石狩川の河口に隣接する石狩市八幡町ワッカオイに同時埋葬の跡が発見され、歯から三〇歳前後の四二人分の男性から戦死が示唆された。そのため、大河が石狩川の可能性が強まる。石狩川を征する者が北海道を支配でき、ここで覇権争いとなったのだろう。河口近くに島はないが、江戸時代中期の「石狩伐木図」を見ると中洲があり、この場所が立て籠もった島かもしれない。

最近、オホーツク人に関し網走市の北海道立北方民族博物館の学芸員である種石悠から、今までの見解を大きく変える説が挙がった。渡来人なら移動順に北から南への文化の連続性があるが、オホーツク人の文化は各地域により多種多様でバラバラだそう。また、北方モンゴロイド人とは違う縄文人に類似した人骨がモヨロ貝塚から多数確認され、その多面性から米村の説だけでは説明できないという。周辺の国家から逃避した様々な民族が、交易をしながら文化を吸収し意図的に国家なき状態を作り上げた集団だろうと。DNA検査でアイヌ民族の成り立ちが縄文人とオホーツク人とのハーフではという説が注目されている。北方交易の主導権を巡り和人と争ったアイヌが、あえて文字を持たず熊送りなど俗世界から離れた自然信仰を尊重したのはオホーツク人の影響だろうか。阿倍比羅夫に敗れたとされるオホーツク人は、律令国家の管理下で暮らすより自由を求め、単に姿をくらまただけかもしれない。今でもロマンを駆り立てる謎の民族であるのは確かだ。



「石狩伐木図」に、嶋と書かれた中洲。今は川に隠れ見えない



網走市立郷土博物館文館モヨロ貝塚館に展示されるオホーツク人縄文人とは違う北方モンゴロイドの風貌だ